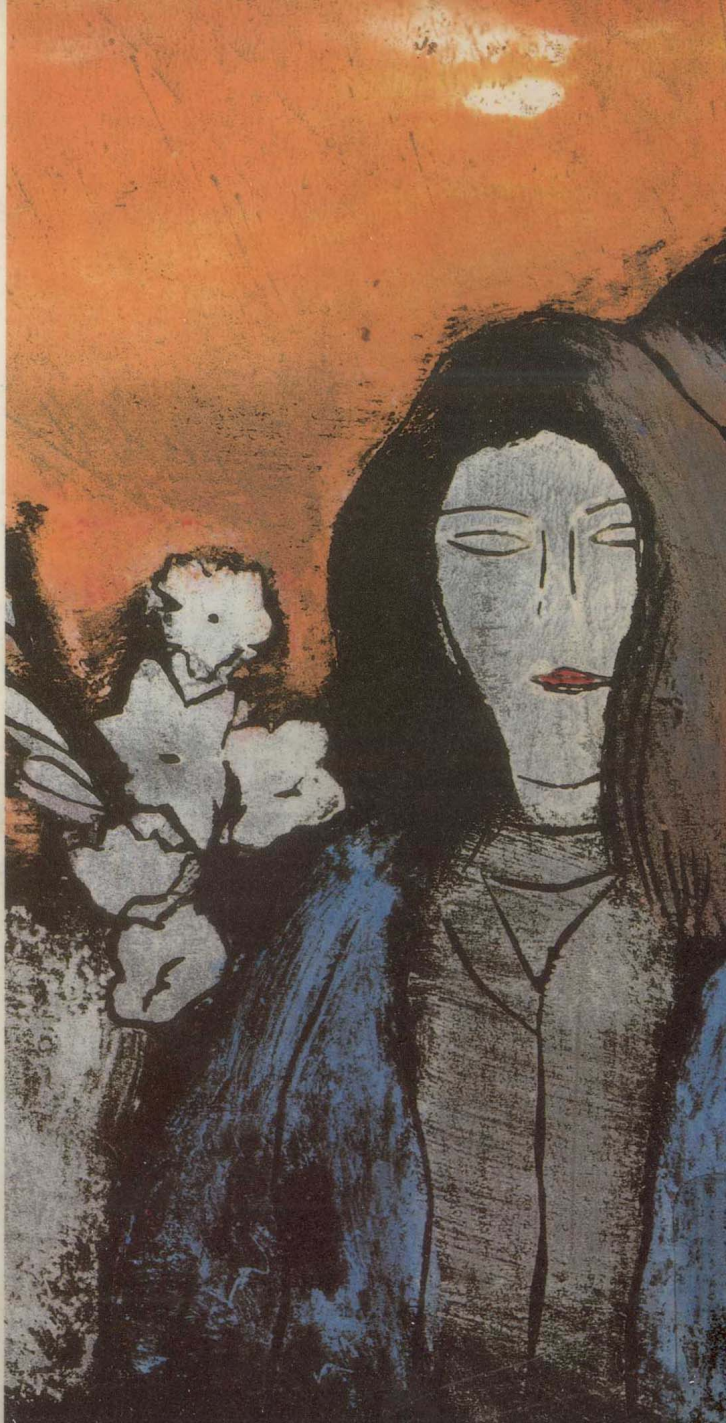
その涙ながらの日

吉川 良



その涙ながらの日

吉川　良

集英社

その涙ながらの日　定価七八〇円

一九八〇年三月一〇日　第一刷発行

著　者　吉川　良
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
〒一〇一　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　二三〇―六三六一（出版部）
二三八―二七八一（販売部）
印刷所　大文堂印刷株式会社
検印廃止。落丁、乱丁本はお取り替えします。
0093―772247―3041
©M. Yoshikawa, Printed in Japan, 1980

その涙ながらの日

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

その涙ながらの日　5
ラストラウンド　89
素晴しい歳月　117

装画　畑農照雄
装丁　竹内宏一

その涙ながらの日

俺の同級生が富士の樹海で死んだ。高校を出て四年、つきあいはなかったが、同じ野球部員として、遺影の前で忘れかけた校歌をうたってきた。あいつはキャプテンで捕手だった。スライディングの練習で、セカンドの返球を受けたあいつと、頭から滑った俺が、ホームベースをめがける。顔面とミットが激突し、土煙の中にもつれて這った夕暮が蘇る。

玄関とは名ばかりの、道路と畳を分けた硝子戸をあける。一人で占めてしまう沓脱場。おふくろが障子の奥から待ったをかけて、道路に後退した俺の全身に塩をふりまく。下駄函の上には白百合の花。めったにないことだ。六畳ふたつに、辛うじて食卓を置いた台所。新しい防臭球を吊した便所と、窮屈な洗面台つきの脱衣場。終日、おやじとおふくろに磨かれて、いささかよそゆきだ。今夜は兄貴が、嫁にしたい娘とその父親を連れてくる。肥えたおふくろが支える踏台に乗って、小男のおやじが背のびして天井の埃を拭いている。トイレへ入った俺に、おやじの声が飛んでくる。

「こぼすな」やれやれ、朝顔だって笑ってる。相手は成金の区会議員さま。あの区には親類が五軒もありまして、十九票ございますとか言ってやれ。「やはり自殺だったの？」おふくろが背骨にもぐった首をひねる。「T大へ入ったというのに」「お前のとりえは、そういう心配のねえことだ」おやじがボロ布の裏を返す。踏台を蹴とばしてやるか。いくら凡な俺でも、喪が心に幕を張っている。ムッとして台所の食卓に坐り、手の届く蛇口で水をくみ、コップで額を冷やす。厭なことを言うものだ。それが子供の、親に向っていうことか、なんぞとよく怒るくせに。親も言葉で子供を傷つける。タバコに火をつけ、肩を落す。台所の窓をつき合せた隣家の主人が、母さん今夜は鉄板焼にしようよ、と声をはりあげる。敷居づたいにゴキブリが来て、古くなったイチコロロッジをくぐって通過する。掃除が済むと、洋服ダンスの鏡の前で、おやじのファッションショーが始まった。あれこれ迷って、結局はYシャツに灰色のカーディガン。「猿股も変えろよ」俺がひやかす。「それはよかろう」すでにおやじは余裕がない。緊張の面持ちで、六十にしては濃すぎる髪に櫛をいれる。「どんなこと喋ればいいんだ」「あんたのとりえは金持だって言やあいい」おやじがカーディガンの釦をとめたりはずしたり。「相手が金持って気が重いね」和服に着がえたおふくろが、たるんだ肌に化粧水をなすりこむ。「なあに、金持と貧乏は裏おもてよ」「うまいこと言うじゃないか」おふくろに感心されて、俺もわれながら上出来のせりふだと顎をつきだす。おふくろが鏡に姿を写す。おふくろの体形、ひょっとして立方体っていうんじゃなかろうか。「これでいいね」弟が二階からポロシャツを見せにくる。仮装行列の楽屋だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

区会議員が娘を連れて来た。あぐらをかいた大柄なガソリンスタンド経営者。チョビヒゲをはやして、背広の胸にバッジを光らせている。父親そっくりの娘が、眼鏡をかけて兄貴と並んでいる。兄貴も眼鏡だ、いきなりのキスはあぶない。俺は要らぬ心配をしている。合せた膝に手をそろえて、おやじが家族の紹介を始めた。これが、と言って少し詰り、ツマでしてと唇をすぼめ、音をたてて空気を吸いこむ。次は俺だと微笑の用意もむなしく、おやじは右どなりの弟を見た。かまわん、俺は順序にこだわる性質じゃない。「兄と同じ、Y大に今年現役で」春からこっち何度も喋っているからおやじも滑らかだ。「皆さん優秀なんですな。ストレートで国立へ入るとは親孝行だ」区会議員、はやまるな。俺は大学へ行ってないのだ。おやじの呼吸が狂うじゃないか。やや前傾した俺の名をおやじが口にした。ちがう、ジロじゃない。正確に言え。俺の名前はジロウだ。「ベンジンのメカーに勤めてまして」またしてもまずい。メカーじゃない。メーカーとのばすんだ。しかも俺がとっておきの見栄を切っている間に、おやじは三度もメカーを連発した。俺は下唇を噛んで笑いをこらえた。「すると技術系で」「はいっ」俺は淀みなく返事した。トラックの運転だって、言ってみれば技術系だ。「私の所は五人とも女でしてね。長女に婿とって商売やらせてますが。けっこうじゃないですか。男ばかりの三人兄弟」一様に晴れがましく反らした我が家族の胸に、それぞれの小鳥がはばたいた筈だ。おやじはうつむいて額を撫でた。おふくろは酌をし、兄貴は膝を崩して天井を仰いだ。姉がいるではないか。なぜ言わぬのだ。おやじとおふくろが嘆んだ以上、俺が言うわけにもいかぬ。「ま、どうぞ」俺は区会議員から酒を受けた。「では」おやじの口調が急にあらたまり、

「とりあえず」で口ごもり、みんなが杯を唇まではこんでしまったのに、「乾杯といきましょうか」とおもむろに言った。俺はのみ干した杯を膝に置いて、姉のことを考えていた。家出し、十何年過ぎていようと姉は姉だ。嫁にいってる娘がぐらいは触れるべきだ。たしかに姉が高三の時、追いかけた志賀は近所で知らぬ者のない札つきだった。然し今でも姉は、強盗の前科がある志賀と暮している。姉の尻の下で足を洗った志賀は別人のようだ。俺の家からすぐ近くの、橋を渡った川崎に、姉がいるのを皆知ってるくせに。もっとも皆に内緒で会っているのは俺だけだが。区議会の苦労話が続き、おやじもおふくろも相槌でいそがしい。台所の戸があいて、きっぷのいい声が跳ね、特上寿司の桶がはこばれた。「お口にあいますか」「なにせ東京のはずれで」おやじとおふくろの、かけあい謙遜。あわないのは自分たちだ。

どうやら無事に対面が済み、兄貴が親娘を駅へ送って行った。おやじとおふくろは、ぐったり畳に寝そべった。我が家で酒のみは俺だけ。膳に凭れてのみなおし。「家は三人兄弟かね」俺がおやじに絡んでみた。おやじはすでに眠っている。おふくろも眠ったふりだ。弟はがつがつ寿司をつまんでいる。「どう思う」俺は弟に聞いた。弟が反応せずにテレビをつける。「消せ」俺の剣幕で弟が立った。おふくろも寝息をたてはじめた。「何かかけてやれ」弟は俺を無視して二階へ上った。俺はビールをのみたくて台所へ行きかけ、押入れから夏掛けを抜いておやじたちにかけた。今夜はビールがふんだんにある。兄貴が戻ってきて台所に坐り、サイダーで息をつく。もし兄貴から姉のことを言いださぬ限り、口なんかきかねえぞ。俺は椅子に足を投げ、気ばってビールを流しこんだ。

背をこごめ、眼鏡を拭いている兄貴を、おやじみたいに貧相だと俺は思った。高校では生徒たちから、どんなニックネイムで呼ばれているんだろう。俺ならボウフラとつけてやる。兄貴も弟も勉強好きなのは、貧相のせいではないか。俺みたいにまあまあの体と顔なら、学問なんかあてにするものか。なんと若さがないんだ。俺より四つしか上でないのに。女だって知らないんじゃないか。兄貴が鞄を取ってきて、薄い雑誌をとりだした。「初めて詩論に挑戦してみたんだ。彼女の詩も載っている」巻頭に兄貴の名前が見つかった。〈緊張と持続と弛緩〉という題だ。「これ何て読むんだ」「チカン」読めなくても生きていけるわい、俺はすぐにそう思う。俺は雑誌を閉じる。それより姉のことを言ってみろ。だいいち狡い。大学を卒業したら間もなく家を出てしまい、一銭だって入れないじゃないか。俺は五万円も入れているんだ。てまえ勝手な時だけ家に来る。今夜の寿司代ぐらい払ってけよ。姉のこと、忘れているのか。よし、俺から仕掛けてやろう。「俺たち三人兄弟だっけか」兄貴は息苦しそうに眼を閉じた。俺は食卓に片肘ついて返事を待った。「よく会うんだ、姉さんと」待ちきれずに俺は呟いた。眼をひらいた兄貴は、十字架に縋る信者のように、サイダー瓶を握ったままだった。姉を許すチャンスじゃないのか。結婚話をきっかけにして、俺より兄貴が望んだ方が、おやじたちも聞く耳を持つだろう。「なんとかしようぜ」と俺は言った。「むずかしい問題だ」腕組みした兄貴が唸った。なにがむずかしい。たとえむずかしくても、俺の話に飛びつくのが兄弟として本当じゃないか。喋るべきではなかった。俺は後悔し、兄貴を恨んだ。それでも血を分けた兄弟か。あやうく怒鳴りだしそうな胸の底を、俺はビールで濡らした。「むずかしい問題だ」

兄貴はまた言い、「姉さんに許されたい気があるかな。姉さんは家を捨てた気だろうし」とつけ加えた。然し、許す方が先決だ。俺はそう思う。俺は自分の尻尾を噛もうとして、ぐるぐる輪を描く犬のようだった。「じっくり考えてみる」兄貴は眼鏡をはずして眉間を揉んだ。弟が湯を沸かしにおりて来た。おふくろも覚めて食卓に来て腰をおろし、はだけた襟もとを合せた。俺は弟に兄貴の雑誌を手渡した。弟の頭は数学でいっぱいだし、兄貴の頭は文学でいっぱい。では俺の頭は？　からっぽだ、と俺は指のささくれを舐めた。おふくろがコップを呑んでしまいそうな欠伸をした。「僕の詩も載せてもらえないかな」と弟が坐った。「お前も詩を書くのか」俺は雑誌をひったくり、「彼女の詩だってよ」とおふくろに名前を探して頁をひらいた。「私は判らないよ」それでもおふくろは義理で活字を追った。弟が一人で茶を啜っている。「誰も文学的才能なんかないのに、どうしてだろ」とおふくろが雑誌を伏せた。「俺はやらんよ」おふくろに片手で会釈して、俺は冷蔵庫からビールを取った。「そうだね。お前が一番家の子らしいよ。一人ぐらいいなきゃね、ふさわしいのが」俺はそういうおふくろの言い方が好きだ。そうだよ、俺がこの家では正統なんだ。「これ、読めるか」俺は弟に弛緩の文字を指さした。「チカン」読めて当然という顔を弟がした。俺はばつが悪かった。「二階に、フランシス・ジャムの詩集残ってなかった？」と兄貴が言った。弟と二階へ上る兄貴に、「ジャムならあるぜ」と俺が冷蔵庫をあけた。笑ったのはおふくろだけだった。硝子戸の後で、おやじが寝言を言っている。「少し貰おうかね」おふくろがコップを持った。俺がビールを注いだ。「おとなしそうな娘さんだね」ちびってのんだおふくろが俺の方に顔を寄せ、声をひ

そめて、「器量は私の方が上だね、ここだけの話」俺はふきだした。「それは言えてる」おふくろ、ちろっと舌を出した。俺はおふくろの上機嫌に合せて、姉の話を持ちだした。ああいう連中は必ず調べるぞ。なぜって婚約もしてないのに、家を見に来るんだから、姉のことだって嗅ぎつけるに違いないと。「そうだね」おふくろが心配顔になった。「いろいろ考えてはいるんだよ。でもねぇ、あの子がどんな思いをさせたか、父さんの許せない気持も判るんだ。元気なのが判ってるから安心なんだけど」それきりおふくろは黙りこんでしまった。実は俺、よく姉に会ってるんだ、と咽まで出かかって俺も黙った。ほんのり染った頬に両手をあてて、おふくろが思いにふける。「娘と会いたくない親が何処にいるかね」おふくろが涙ぐんだ。俺の頭に浮んだのは姉ではなかった。ホームベースの前に立ち、弓なりに身体をそらし、全ナインに声をはりあげたキャッチャーのあいつが胸を占めた。あいつの声は、センターにいる俺の耳まで、一直線に届いてきたものだった。なにがあったか知らないが、死ぬことはなかったんじゃないか。一番頭のよかったあいつが死んで、一番頭の悪かった俺が生きている。俺は天井に向けて両手をなんとなく差上げた。降参じゃない。あいつの声に応えて、センターの守備位置でグローブを掲げたつもりなんだ。「おどろいたろね、あばら屋で」おふくろが話題を変えようと、残りのビールをのんだ。俺もシミだらけの天井を見た。二階は四畳半と物干場。古材で建てたのが俺の生まれた年だというから、傷むのも無理はない。「さあ寝るべ。明日から忙しいんだ」俺は台所口から小屋へ引上げた。

僅かな空地にあった、暮しの滓ばかり詰っていた物置きをこわし、小屋を建てたのは先月だ。二

階は弟が占領していたし、俺は自分の部屋が欲しかった。飲屋でよく会う大工に俺は相談した。要するに屋根と窓がありゃいいんだろ、七十万あるか、休みにこさえてやらあ。おやじとおふくろ、泡をとばして反対した。金は俺が出す。それが判ると電鋸が響いた。台所を塞がれる裏の家と一騒動の末、二畳の物入れと三畳の板の間が完成した。古道具屋で買った病院用ベッドと一脚のソファ。弟が入りたいようなことを言った。俺は工場で天引してもらっていた、残金二十九円の通帳で、弟の横つらを張った。てめえで銭を稼いでみろ。怒鳴って俺は、いつかおやじから同じ目に合わされたことを思い出した。「いこうぜ」俺は寝台にころがって呟き、ベンチ前の円陣で拳を振った、死んだあいつの真似をした。

一週びっしり、同行販売で俺は忙殺された。同行販売というのは、メーカーの車に商品を積んで、問屋のセールスマンが同乗し、その得意先の薬局や雑貨店を個別に廻る。消臭剤や燃料用アルコール、それにカイロ用ベンジンの予約受注書に印を貰って歩くのだ。俺はセールスマンの指示どおりにトラックを走らすだけだが、終日の走行距離はかなりだ。毎日セールスマンの顔は変るが、態度は似たりよったりだ。みな地方出のいわば小僧あがり。ひとたび薬局におりたつと、驚くほどに腰が低い。そのぶん、白衣の薬剤師の頭の高いこと。いくら国家試験をパスしたとはいえ、セールスマンから先生と呼ばれてくわえタバコだ。薬屋が先生で、なぜ八百屋が先生でないのか。俺なんざ、ワッパマワシだ。そんなにおじぎが欲しいなら、なんぼだってしてやるさ。商品をおろし、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com